

アンパイア（第3話）

『一体、いくつの偶然が重なったのだろうか？』

県東地区1回戦、主審を務める押見は、朝からの状況を思い返していた。

試合を行うA中の主将は、県東地区中学野球を支えている名将の子供だった。子供が出ている試合の審判に入らないのが通例だが、組み合わせの関係と、他の先生の日程が合わず、名将がこの試合の審判をするしかない状況になった。

技術的には、名将が主審をするべきだが、さすがにそれはまずいということになり、押見に白羽の矢が立った。名将は『俺は一塁で大人しくしているよ。』と言って一塁審をすることになった。

試合が始まった。A中の相手のB中の左投手は一塁に投げる牽制球がうまく、A中は盗塁のスタートがきれなかった。そして、A中が盗塁をした時、B中の投手は巧みな牽制球を投げ、A中の一塁ランナーを牽制でアウトにした。

スタンドやベンチから声が聞こえてきた。『あの牽制球、ボークなのでは？』ボークというのは、不正投球を意味するが、一塁に牽制球を投げるだけではボークにはならない。ホームに投げる動作の途中から、一塁に投げるとボークなのだが、左投手の場合、体重移動や右足の踏み出しが微妙で、ボークの判断は難しい。また、左投手の一塁牽制のボークの判断は主審よりも、足の踏み出しがよく見える一塁審がするのがセオリーだ。

イニングの間に、押見は一塁にいる名将の所に行った。『先生、申し訳ないのですが、あの左投手のボークは自分にはとれません。先生に任せてもいいですか？』すると、名将は『俺が見るから任せろよ。』と言った。

試合は終盤になり、得点は0対1で、A中は負けていた。A中が0点なのは、盗塁が出来ないことが大きな要因だった。押見は思った。『この試合はボークをとるか、とらないかで大きく変わる。この判断を父親である名将に託すのはさすがに酷ではないか？』

最終回、A中がノーアウト一塁のランナーを出した。2球目、そのランナーが走った。B中の投手は投球動作の途中から、一塁に牽制球を投げた。

押見は思った。『ボークをとるか？どうする？』その時だった。『ザツ、ボーク。』一塁から大きな声が聞こえた。名将は、右手をマウンドの方に向け、ついにボークをとった。

最終回はノーアウト二塁になったが、B中は踏ん張り、0対1でA中は負けた。試合後、今まで見たことない疲れた表情の名将がいた。押見は言った。『すみません。ボークがとれなくて。』すると名将は『俺に任せるって言っただろう。』と言い、B中の先生に『厳しくしてすまなかったな。』と言い残し、この後の自分のチームの試合の準備に向かった。